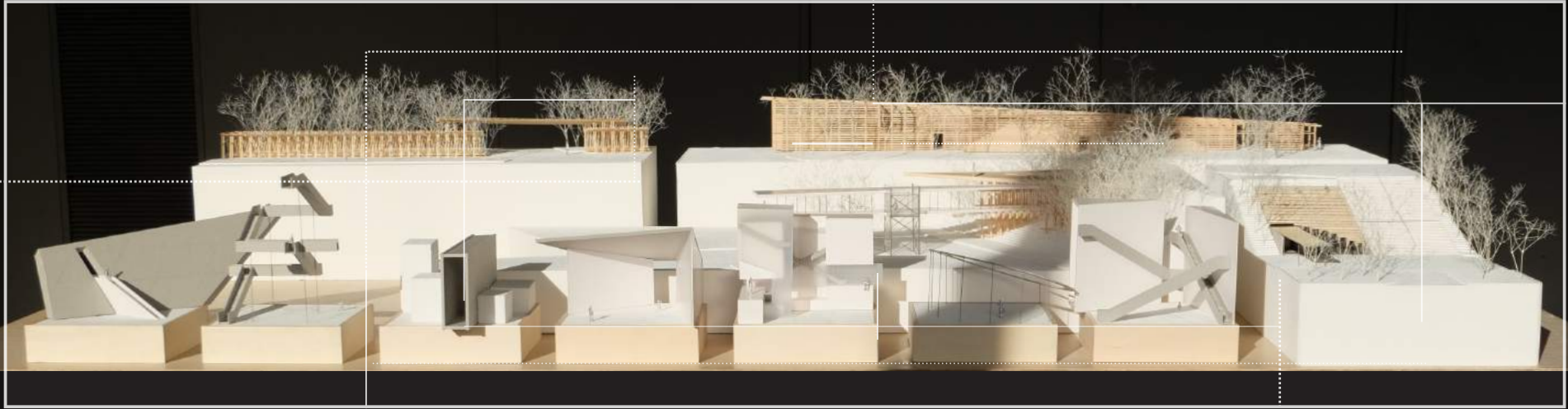


# 接続のウムヴェルト

/ ミュージアムから読み取る“行間”の空間体系研究

これは些細な接続の集合によってアウトラインが浮かび上がる、緩やかであり確固たる建築体系の習作である。

Project | CONNECTIVE UMWELT



## 0. 概要 [ Summary ]

谷川俊太郎の詩において、“行間”は語句や文を強調し、リズムカルな統一性をもたらす要因として作用している。音楽・絵画・映像作品、様々なジャンルにおいて行間は「間」や「ひとつの契機」として作用している。建築においても同様に、行間とは豊かな空間体験を建築に付与するものであり、行間が「建築の全体を獲得するひとつの手掛かり」であることを明らかにするプロジェクトである。

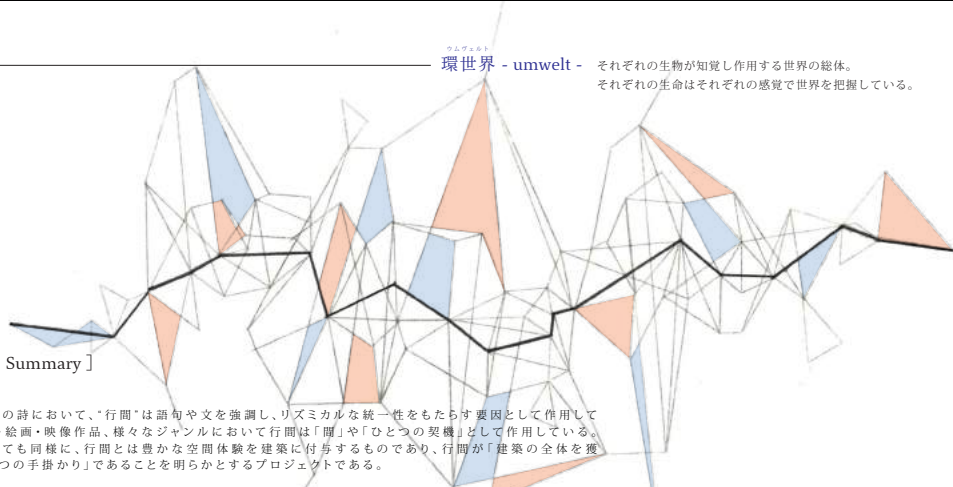
ミュージアム建築を対象に事例研究を行い、行間空間の所作の抽出・考察を行う。抽出された行間の空間言語を再構築し、16の空間アイコンと7の空間モデルを作成した。これにより行間の所作は「建築の外部環境下においても作用し、「日常空間へ波及する」ものである」と推測され、設計提案にてその有用性を模索する。

調査対象地として上野恩賜公園を選定する。当公園の潜在的価値である花見・進見の文化は日常的には余白の中に埋没したものとなり、豊かな地形的特徴は面的に処理された動線が配されるのみとなっている。その2点を糸口とした空間を検討する。  
“行間”の連鎖的所作を日常空間へと転換するため、余白とも捉えられる公園空間に点在する「行間の空間装置」を提案する。そこに生じる小さくとも確かな接続は、その次なる接続の好機を与えるであろう。

接続のウムヴェルト、些細な接続の集合によってアウトラインが浮かび上がる、緩やかでありながらも確固たる建築体系の習作である。

## 環世界 - umwelt

それぞれの生物が知覚し作用する世界の総体。  
それぞれの生命はそれぞれの感覚で世界を把握している。



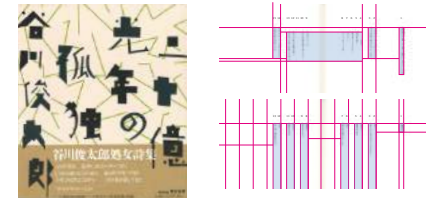
## 1-1. 行間の作用について [ Various “in Between” ]



行間は「間」や「一つの契機」という形で作用し、その周辺や前後に興行きや関係性を与えている。

[4'33"] 1952 - John Cage  
[赤の7—月] 1921 - Paul Klee  
[2001 aspace odyssey] 1968 - Stanley Kubrick

## 1-2. 谷川俊太郎から読み取る行間 [ Various “in Between” ]



行間によって文字は時に生き生きとした調律を奏で、時に深刻な一言として読者に突き刺さる。

「二十億光年の孤独」記載「地球があんまり寂れる日には」「梅雨」から

## 1-3. 行間の定義 [ Definition of “in Between” ]



3つの前提を元に「建築における行間」を以下と定義する。  
「主空間に準じるものであり、2つの空間に接点を持ち、双方に関わりを持つ空間および面」

1. 主空間ではないこと。
2. 2つの空間の比較によって判定されるものであるということ。
3. 行間として判定されるものは、空間であり面でもあるということ。

## 2. 行間の変遷 [ Transition of “in Between” in the museum ]



神聖化された宝物庫 | 行間としての展示空間 | 主空間としての展示空間 >>> 多様化するミュージアム行間

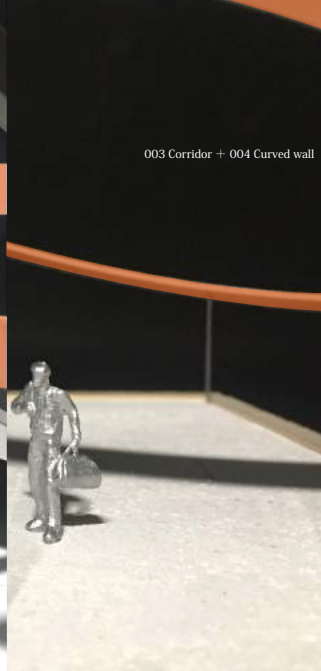
行間空間は建築内部に留まらず、射程を外部へと伸ばし、その所在も多様化している。

小空間の集合においては接合部、柔軟な大空間においては内在/外在する形で出現する行間。現在、ミュージアムの形態は多岐にわたり、ミュージアム自体が周辺との強い役割を持つようになった。

4. 行間の作法の抽出 / 16の複合形態の発掘と7の空間モデルによる検討 [ Second analysis / 16 icons + First Design / 7 models ]

010 Skin + 011 Stair/Slope

4-2. 空間モデルの作成 [ In Architecture to Outside ]



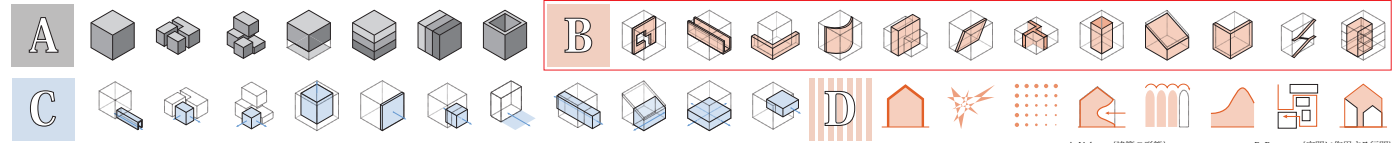
3-1. ミュージアム建築を対象とした事例分析 [ Analysis Example ]



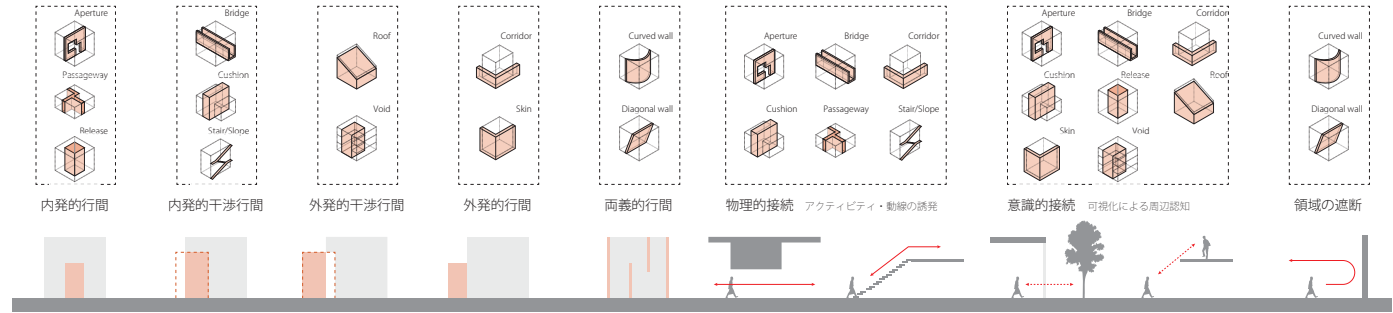
ミュージアム建築が持つ展示室を主空間としたとき、その従空間たる行間の性質は明確に判定可能である。

- 事例分析:参考資料
- GA現代建築シリーズ01(美術館1)(2001.12)
  - GA現代建築シリーズ02(美術館2)(2008.11)
  - Tomihiro Art Museum/建築・都市ワークショップ編(2005)
  - ADMORI MUSEUM OF ART (2006)
  - Zaha Hadid recent project(2010)
  - 伊東豊雄作品集: 2002-2016 (2016)
  - TADAO ANDO 2008-2015 (2015)
  - KENGO KUMA 2006-2012 (2012.11)
  - RENZO PIANO BUILDING WORKSHOP Volume4 (2000.1)
  - 新建築(2004.11, 2005.4, 2010.12, 2012.9, 2014.9)
  - JA - THE JAPAN ARCHITECT 65 (2007), 67 (2007), 80 (2011), 88 (2013)
  - a+u 建築と都市 Architecture and Urbanism 466 (2009.7), 538 (2015.7)

3-2. 収集した各種アイコン [ Result ]



3-3. 建築ヴォリュームにおける位置関係 (考察1), 行間周辺へ誘発する効果 (考察2) [ Consideration 1,2 ]



4-1. 複合化アイコン [ 16 Complex icons ]



事例分析とその考察から、行間は単に主空間を関係付けるのではなく、建築自体に特徴的な空間を与えることで様々な空間体験を提供し、外部と一連となった建築計画を可能とする要因である、ことが明らかとなった。

また、二次設計および一次設計として作成した行間の複合空間モデルから、ミュージアム建築から確認された行間の所作は建築の外部環境下においても多様な空間体験と対象事象間に新たな関係性を付与する「日常空間へ波及する行間空間」となり得ることが推測される。

5. 設計 | 接続のウムヴェルト [ Connective Umwelt ]

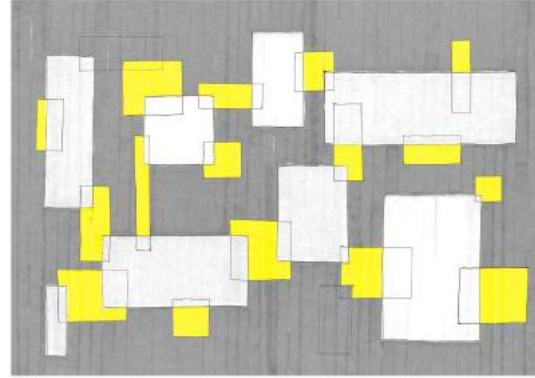
5-1. 敷地概要 | 上野恩賜公園について [ Site Survey ]



行間溢れる「広大なミュージアム空間」

上野恩賜公園はミュージアム建築などの多数の文化施設を内包し、公園内の並木や広場がそれらを接続する行間空間として作用する。

5-2. 設計コンセプト [ Concept Drawing ]



「行間の余波の揺りが日常空間に干渉する」行間の空間装置

接続のウムヴェルト[Concept drawing-1] 建築を廻る行間空間が空間体験を提供し、建築を構成する

Site 1 斜行する表裏



インフォメーションセンターの庇が小広場に突き刺さる

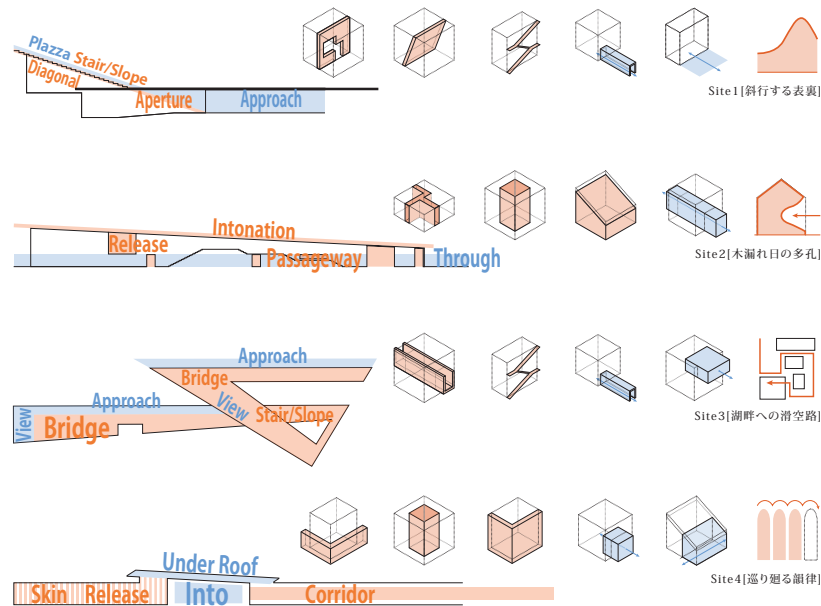


JR上野駅を山手線から出てUENO3153沿いを進むと右手に上野恩賜公園の入口が見えてくる。京成上野駅やアヤマ横丁からはほど近く、上野の交通や商業と近接する公園のエントランスの役割を担う。[fig.1-1] UENO3153橋の階段を登ると噴水やコインロッカーが設置された広げた場所が広がる。そこから西郷隆盛像や上野の森美術館へと向かう大階段[fig.1-2]の周辺をSite 1とする。

5-3. 設計敷地 [ Design Site ]



5-4. 各設計に適應する各アイコン [ Icon for each site ]



Site 1 [斜行する表裏]

Site 2 [木漏れ日の多孔]

Site 3 [湖畔への滑空路]

Site 4 [廻り廻る韻律]

行間は接する空間へと作用し、その小さな間わりの連鎖によって建築が構成されている。建築の外形を脱ぎ捨てた行間空間は、点在することでアウトラインが浮かび上がり、それは建築の射影を拡張させたものとなる。

選定された事象間を接続する4つの「行間の空間装置」を計画。

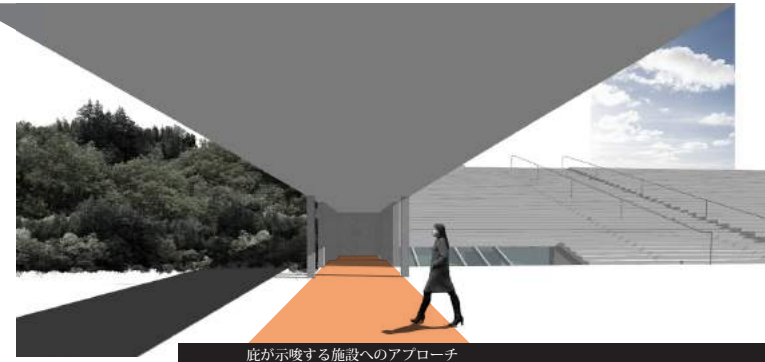
この広大な公園内に点在する空間装置を配置することで、空間装置が生み出す間と接続が次の空間や行為への手掛かりとなる。その連続によって公園内のアクティビティ同士を関連付け、一つの環世界的関係を当公園に付与する。

- 行間アイコン
- 001 Aperture [開口]
  - 006 Diagonal [斜壁]
  - 011 Stair/Slope [垂直移動]
- 接続アイコン
- 001 Approach [導入路]
  - 007 Plaza [前面広場]
- 空間体系アイコン
- 006 Roof shape [屋根形状]

- 行間アイコン
- 007 Passageway [通路・廊下]
  - 008 Release [内部の解放]
  - 009 Intonation [即席]
- 接続アイコン
- 008 Through [貫通]
- 空間体系アイコン
- 004 Periphery [外周要素]

- 行間アイコン
- 002 Bridge [渡り廊下]
  - 011 Stair/Slope [垂直移動]
- 接続アイコン
- 001 Approach [導入路]
  - 011 View [景観]
- 空間体系アイコン
- 007 Route [動線形状]

- 行間アイコン
- 003 Corridor [回廊]
  - 008 Release [内部の解放]
  - 010 Skin [外皮]
  - 006 Into [貫入]
  - 009 Under roof [屋根下]
- 接続アイコン
- 006 Into [貫入]
- 空間体系アイコン
- 005 Repetition [空間の反復]



庇が示唆する施設へのアプローチ

繁華街側の公園入口にインフォメーションセンターと動線に付与される階段広場を設計する



インフォメーションセンターの屋根は既存の大階段と接続した広場となる

# Site 2

## 木漏れ日の多孔

大小の隙間が幾重の視線や動線を交差させる



上野の森美術館前に広がる樹木群に樹木の間を抜ける貫入動線を設計する



樹木群を貫くように動線と階段空間が疾り抜ける



日常的には単なる昇降階段、そこはアクティビティと滞在の契機となる



Site.1から階段を登った先に広がる上野の森美術館・日本芸術院・東京文化会館・清水観音堂に囲まれた樹木群の中をSite.2とする。[fig.2-1]樹木群の中心を走るように配された歩路沿いに様々な樹種が立ち並び、春には花見の舞台として栄える。歩路から樹木群へ入ると、もっくくをはじめてとした様々な樹種が確認された。さくらの季節には「ハレの舞台」として花見客で賑わいを見せる一方で、日常的には静寂の中で佇まい、その対比が「ケ空間」としての物語らしさを醸し出している。Site.2としてはこの樹木群を抜ける動線を選定し、設計を行う。[fig.2-2]

# Site 3

## 湖畔への滑空路



池へと伸びるボックスが大地へと突き刺さり、先端では壮大なパノラマを獲得する



不忍池弁天堂へと直進する立体アプローチを飛翔させる



上野恩賜公園の広場から伸びるさくら並木を西へと下る階段、その先には不忍池へと浮かぶ不忍池弁天堂が望める。[fig.3-1]池には蓮が多数樹物し、江戸時代には蓮見の名所として栄えていた。Site.2の清水観音堂から上野山(山)の地形を切り込むように不忍池へと伸びる階段空間は、不忍池弁天堂へと伸びる参道空間のようである。[fig.3-2]この昇降行為と参道のように伸びるアプローチの存在する場所をSite.3とする。



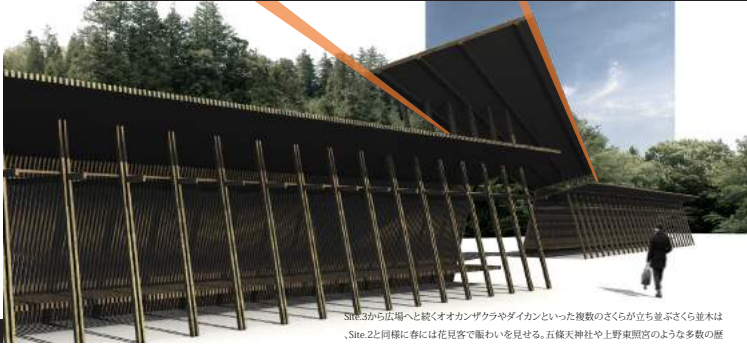
懸造りで支えられた舞台が台地から迫り出す

不忍池弁天堂へと続く立体的なアプローチ空間を設計する

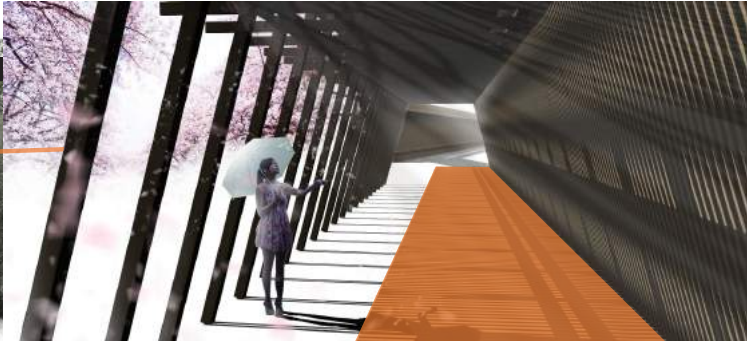
# Site 4

## 巡り廻る韻律

回廊の抑揚が上野東照宮への入り口を示唆する



Site.3から広場へと続くオオカンザクラやダイカンといった複数のさくらが立ち並ぶさくら並木は、Site.2と同様に春には花見客で賑わいを見せる。五稜天神社や上野東照宮のような多数の歴史的建造物と接し、上野恩賜公園の特徴的な空間として南北に長く配される。並木沿いには中央に太い主動線とサイドに細い副動線が走る。[fig.4-1]副動線側はさくらの季節には花見の舞台として多くの花見客の行為を誘発する場となるが、日常的には活動の様子が確認できない。そこでこのさくら並木と並行して走る副動線を計画地とし、ケーススタディとして広場と上野東照宮[fig.4-2]と接する並木沿いをSite.4とする。



日常と非日常を接続させる回廊空間がさくら並木を巡り行く

噴水広場から南方へと伸びる日常 / 非日常を横断する回廊を設計する



反復する部材の隙間に細切れの景色が連続する

